

あたたかい一杯の裏側に

秋田市立城東中学校 3年 伊藤 佑月

何気ない学校生活。何気ないお昼の時間。私はふと不思議に思うことがある。毎日提供される温かく栄養のある給食が、いったいどれほどの手間と費用によって支えられているのだろうか。自宅での食事作りを思い返せば、献立を考えるのも調理するのも一苦労だ。ましてや、何百人分もの食事を、毎日、時間通りに、栄養バランスまで考えて準備するというのは、並大抵のことではないはずだ。調べてみて現実を目の当たりにした。巨大な釜で煮込まれるスープ、丁寧に下処理された食材、慌ただしくも整然と働く調理員の方々。そして、衛生管理や栄養バランスを徹底するために、細かな記録と点検が行われていると知った。想像以上の労力と責任が、私たちの一食に込められていた。だが、さらに驚いたのは、その運営の多くが税金によって支えられているという事実だった。

私たちが納めている給食費は、あくまで食材費の一部にすぎない。実際には、施設の維持管理費、設備投資、光熱費、調理員や栄養士の人工費など、さまざまな費用が必要であり、その大半は市や国の予算、つまり税金によってまかなわれている。「税金で給食が成り立っている」という事実は、私にとって一つの転機だった。

これまで私は、税金と聞いても「給料からひかれるもの」「大人たちが不満を口にするもの」というくらいの認識しか持っていた。しかし、目の前の食事に税金が使われていると知った瞬間、それはまったく違った意味を帯び始めた。税金はただ国に「取られる」ものではない、社会全体の未来と安全、そして私たちの「当たり前」を形づくるための投資なのだ。この給食だけではない。教科書、図書館、道路や公園、さらには病院や消防といった社会インフラまで、あらゆる場面で税金は使われている。しかし、それらの多くは「あって当然」と見なされ感謝されることはない。目の前のあたたかい一杯のスープが誰かの働きと、社会全体の支えによって生まれていること。その一杯が、私の健康をつくり学びを支えてくれていること、それに気付いたとき、私は給食のありがたみを初めて心から実感した。

将来、私も働くようになれば税金を納める立場になる。そのときには、きっと思い出すだろう。子どものころ何気なく食べていたあの給食。その裏側に合った無数の「見えない支え」の存在を。そして今度は自分が支えの一部となって、未来の誰かの食卓や学びを支える番だということを。日々の生活のなかで税金のありがたみを実感する機会はそう多くない。けれど、だからこそ私は毎日食べている給食を通してその存在に気づけたことを大切にしたい。

「あたたかい一杯の裏側に」—そう思えるようになった自分の変化もまた、社会からの贈り物なのかもしれない。